

日々のミライが、幸福
でありますように

Rogue 5

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ウルトラマンメビウス、ヒビノミライは今日も地球を守り戦い続ける。

万の月日を経て、宇宙の壁すら隔てても地球の人々を守る為に。

そんな彼は祈り、祈られる。

「日々のミライが、幸福でありますように」と。

ウルトラマンメビウスの二次創作短編です。時系列はウルトラマンジード以降のメ
ビウス本編から万単位の年を経た時代になります。

目次

日々のミライが、幸福でありますように

日々のミライが、幸福でありますように

闇の中、少女が一人うずくまつていた。

「……」

大きな、本当に大きな樹の基に築かれた街。ところどころに焼け焦げた建物がある街の中心に築かれた一際大きな建物の中、ぼろぼろの服装の少女の姿は髪もほつれ、汚れまみれで大変に見ずぼらしく憐れみを誘う状態だ。だがそれ以上に見る者に憐れみを抱かさえるのはその目だ。何の光も希望もないがらがんどうの虚ろな目。それは様相と相まつて少女の歩んできた悲惨な人生を想起させた。

『シェアツ！』

「ぐ…おおおおおおお!! 馬鹿な…俺がこんな…！」

赤と銀の胸に無限を象つたかのようなマークを印した巨人の光剣が両腕にドリルを装備した戦闘兵器を次々と両断し、爆発させる。激しい戦闘を意味する光景であるが、少女の心の虚ろさは上空で繰り広げられる激戦と、その終焉を意味する爆炎と断末魔、そして各地から上がる歓声にもなんら興味を持たず、反応を見せない。

少女にはあざかり知らぬことだが赤と銀の巨人はウルトラマンメビウス。宇宙の平

和を守護する光の国の宇宙警備隊員でもウルトラ兄弟として讃えられるエースの一人であり、複数の宇宙をまたにかけて暴れまわる宇宙海賊、ある目的からこの星を狙い続ける輩たちの討伐の為この星へ來ていたのだ。

戦いを終えたウルトラマンメビウスの身体が光となつてほどけていくと、建物の中に現れたのは優しさと勇敢さを兼ね備えていることが一目でわかるような、柔らかくそれでいて強靭な雰囲気を纏つた青年となる。

「僕はヒビノ・ミライ。ウルトラマンメビウス。君の名前はなんて言うのかな？」

この姿になつた時のメビウスはかつて青い奇跡の星、地球で仲間と共に戦つてきたときの名前を用いる。膝を曲げ少女に目線を合わせて問う。彼の醸し出す暖かい雰囲気は自然とかたくなになつた人の心を解きほぐす物。しかし少女は何の反応も返さない。そんな心が壊れ切つたかのような少女の反応を見てミライの顔もまるで自分の苦しみであるかのように歪む。

「辛かったね、苦しかったね……。でももう大丈夫だ。」

自身の服装が汚れるにもかかわらず未来は少女を優しく抱きしめる。

「君の未来が、どうか幸福な物でありますように」

青年の真摯な祈りに、太陽のような温かさに、少女の虚ろな目にかすかに光が灯つた。

太陽系第三惑星地球。あまねく宇宙のほとんどに存在する地球と同様に美しい、この宇宙の地球上に住まう人々は今日も平和な日常を謳歌していた。特に日本という国に住む人々は今日が休日である日曜日であることもあり、多くの人々が街へ出かけつかの間の休息を楽しんでいる。

「次のニュースです。先日衛星軌道上で防衛軍とウルトラマンに撃破された宇宙怪獣ですが、その後の防衛軍調査部の調査の結果何者かによる人為的作為が見られ——」

高層ビルに設置されたビジョンがニュースを流す中様々な人が交差点を通り歩き、または少し離れた場所にあるオブジェを待ち合わせ場所として集まつていく。前衛芸術のような奇妙なオブジェはこの街の名物なのだろうか、休憩の為に備え付けられたベンチがあることもあり多くの人が集まつていく。うら若きボニー・テールの少女もその一人だ。

「えーっと……あ、いた！ミライさん！」

待ち合わせていた人を見つけたのだろうか少女はぱつと顔を輝かせると手を振りながらかけていく。その視線の先いたのは高校生程の年頃の少女よりもやや年上の青年だ。少女の呼ぶ彼の名前をヒビノ・ミライと呼ぶ。

「やあ久しぶりだねキヨウコちゃん！それにしても背が伸びたな～」

「へへへ。成長期だからね。じやあいこつか」

キヨウコと呼ばれた少女はミライの手を取り平和な街に変えだしていく。幸福で満たされた幸せな街。そして穏やかな雰囲気を纏つた少女。その平和な光景にミライは目を細める。青年らしい容姿に似合わない何処か老成した仕草だった。

キヨウコとミライが初めてあつたのは数年前、キヨウコの曾祖母がなくなつた日の事だ。キヨウコの曾祖母が彼岸へと逝くその日ミライが息を切らせて駆け付けてきた。曰く彼は曾祖母の友人なのだと。ただならぬ雰囲気に病室へ通された彼は病室の曾祖母と彼は二言三言言葉を交わした。その交された言葉が何であるかはキヨウコは知らない。ただ一つ分かつているのは曾祖母がこの上なく安らかな顔で逝つたという事。

それからもミライは大好きだつた曾祖母の死を悲しむキヨウコを幾度も励まして勇気づけてくれた。そんなミライとの交友はキヨウコの家族ぐるみで続き、キヨウコが高校生になつてからはミライが忙しくなつたこともあり、会う頻度が減つた物の仲の良い従妹同士のような二人の関係性は変わらない。今日は一年ぶりにミライに会う日だつ

た。今日この日をキョウコは何日も前から楽しみにしていたのだ。

そうして二人は休日を楽しんでいく。ある時は映画館で

「ミライさん！この映画面白そうだよ『ナチスシャークＶＳ悪魔男』ってやつ！ＴＶでもすごい宣伝してたし！」

「……キョウコちゃん悪いこと言わないからそれはやめとこうよ。こっちの「吾輩はウルトラニヤンである。名前は漱石」ってやつの方がいいと思う……絶対に」

結局周囲の人のススメもありミライのおすすめの映画を二人で見た。最初はキョウコもナチスシャークＶＳ悪魔男に未練があつたがミライの進めた映画が面白かったのと、シアターから出てきた人たちの表情が能面の様になつていたのを見てこっちの映画を選んで良かったとほつとした。

その後は二人で買い物に行つた。ショッピングモールを見て色々と買った。

「ミライさんこれなんかどう？保育園の子たちにいいんじゃないかな」

「うわあハネジローのぬいぐるみなんてあるんだ！キョウコちゃんこれを買おう！」

二人が持つてているのは羽のついた生き物がデフォルメされた可愛らしいぬいぐるみ。ミライとキョウコはいろいろな店をめぐつてショッピングを楽しむ。買う物の多くはキョウコの欲しいものだが、同時にミライがボランティアに行つてている保育園や病院の人たちにプレゼントしたい物も買つていく。

そしてその後は二人でお茶をした。評判のお店との事だつたがなんと店長はネリル星人という宇宙人だつた。正式にビザを取つて地球に滞在している彼はミライの以前からの知り合いだという。

「お久しぶりですミライさん！お連れのお嬢さんもウチの特製ケーキをどうぞ召し上がりください！」

「え？こんなに頂いていいんですか⁈」

ミライとキヨウコが慌てるほどにリーラというネリル星人はサービスが良くお土産までくれた。宇宙人という事から当初はキヨウコは驚いたが彼の親切な態度に触れ、また人々から好かれている様子を見ていい人なんだと安心した。

そんなふうにしてキヨウコとミライの穏やかな休日は過ぎていく。兄のように思う人と一年ぶりに過ごす休日は実に楽しくあつという間に夕日が暮れ、帰る時刻になつた。

「はーいっぱい遊んだねー。久しぶりで楽しかったー」

「僕も楽しかつたよ。やつぱり平和な休日つて凄い良いね……どうしたのキヨウコちゃん？」

夕焼けに染まる河川敷。一昔前のドラマのロケーションのような道を二人は歩んでいく。そんな平和な道のりを歩んでいく中キヨウコは緊張を帯びた表情を浮かべる。

彼女にはミライに聞きたいたことがあつたのだ。

「ミライさん：私聞きたいことがあるんだ。幾つか、いいかな？」

「うん。なにかな？」

「まず最初に：ミライさんつてあのウルトラマン、だよね」

「知つてたんだ」

ウルトラマン。それは幾多の宇宙を守る光の巨人たちの名。ある者は超古代から人々を見守りまたある者は絶望に抗う人々と共に戦う。そんな彼らはこの宇宙の地球上においても存在する。数年前からこの地球で悪しき宇宙人や怪獣と戦い続けているウルトラマン、ウルトラマンメビウスが。

「うん。ひいおばあちゃんが死んだ少し後に：蛇みたいな宇宙怪獣が来た時があつたよね。あの時：見たんだ。ミライさんがウルトラマンに変身するのを。だから知つてた。ミライさんがウルトラマンなんだって」

「その通り。僕が：ウルトラマンメビウスだ」

「あはは…やつぱりそうだつたんだ。て、いう事はひいおばあちゃんも宇宙人だつたの？」

やや驚いたような様子のミライにキヨウコは問い合わせる。キヨウコに宇宙人への偏見はない。それでも自身のルーツが宇宙にあるという点はもしかしたらと思つていたが

衝撃的であった。

「うん。君のひいおばあちゃんも宇宙人。生まれ育った星の名前は」

そう言つてミライはキヨウコに聞きなれぬ星の名前を伝える。今は人のいないその星がキヨウコの曾祖母の出身地だという。

「そななんだ…。あともう一つ聞いていいかな?ミライさんがひいおばあちゃんに初めて会つたのはどんな時だつたの?」

「……今でもその時のことはよく覚えているよ。君にはつらい話になるかもしねないけど」

「構わない。前から、ミライさんが最後にひいおばあちゃんを見送つた時から、ずっと気になつていたんだ。二人はどういう風に出会つたんだろうって。だから:教えて」

キヨウコの懇願にミライはうなづく。そして彼らの出会いについて話しだした。

およそ100年ほど前になるだろうか。もうすでに滅びたというキヨウコの曾祖母の生まれた星はもとより戦乱から逃れた移民者たちの集まりが作つた星であることもあり、非常に人口が少ない星であつた。そのままでは侵略者からも見向きもされる事のない辺境の星として長く長閑な時を過ごしていただろう。しかしその星には一つ特筆

すべき点があつた。その星には「命の樹」という宇宙でも一本しかない大樹が存在したという点である。

命の樹は一説には全ての生命の起源となる植物であり、無数に実った果実の一つ一つまで強大な生命エネルギーを秘めているという。それはその星への移民者たちが移民からしばらくしてから判明した事実であるが、その事実は彼らに恵みをもたらすとともに災いをもたらした。命の樹を狙つた宇宙海賊の襲来である。

無論その星の人々も備えを怠つてはいない。持てるだけの防衛兵器の配備を行つてはいたがベリアル帝国軍のバックアップの元最新式の兵器を次々投入する宇宙海賊には抗するべくもない。瞬く間に緑豊かだつた星は荒廃していつた。日に日に悪化していく戦況。街も人心も荒れていく中彼らはある禁忌に手を出した。それは命の樹の力を軍事転用する事。

転用の方針としては宇宙海賊が40～50メートル級の兵器を使用していくことからそれらの兵器と戦闘が可能な人間を生みだす事を考えた彼らは次々と命の樹の力に適合した人間を生み出す為の人体実験を始めた。その唯一の成功例が――キヨウコの曾祖母だという。

曾祖母は成功例として戦線に投入され当初は成果を上げたが、徐々に宇宙海賊に押しきられるようになつていつた。破壊されていく両親との思い出の詰まつた街並み。嘆

く人々に非難する声。まだ幼い曾祖母の心身はボロボロになつていつたという。そしていよいよ宇宙海賊の新兵器に曾祖母は決定的な敗北を喫し倒れ伏した。そんなときに来たのが——ヒビノミライ、ウルトラマンメビウスだ。

「それが……僕の君のひいおばあさん、トワと、僕の出会いだ」

「酷い……そんな、そんな辛い事がひいおばあちゃんにあつたなんて」

其処まで話したところでミライは一旦話を切る。大好きだった祖母のあまりに壮絶な人生に彼女は口を押えていた。

「……それでその星はどうなつたの？」

「最終的には宇宙海賊を倒して星を守ることは出来たけど命の樹も僕が知っている物よりもずつとしおれていて小さかつた。多分元から寿命が近かつたんだろうね。生き残つた人々の多くは地球や他の平和な星に移り住んだよ」

「……良かつた」

ミライの答えにキヨウコはホツとする。今彼女がここにいる事。それは戦いの果てに掴み取つた物がなかつたわけではないことを示すが、それでも彼女は安心を感じていた。

「ひいおばあちゃんの戦いは無駄じやなかつたんだ」
「あの戦いは無駄じやない。それは誰にも言わせない」

それだけは言いたかったのかやや強い口調でミライは断言する。

「そんな事があつたから戦いが終わつた後も僕は不安だつた。トワがこの星で幸せになる事が出来るか。だから心配して何度も顔を見に来ていたんだけど――でも、かつて僕のいた地球と同じで地球の人々は優しい人たちが多かつたんだ」

かつてミライはこの世界とは別の地球で仲間と共に平和を守る為に戦つていたとう。その時も敵の宇宙人の策略により人の悪意に苦しめられることがあつたが、彼を支えた

地球の人々の多くは優しかつたという。そして共に戦つた仲間たちとの日々は万の月日を経た今でも胸に焼き付いていると。

「苦しい事もいっぱいあつただろうね。でもトワは友達を作り家族を得てこの星で幸せな日々を送つた。そして君のおじいさんが生まれ――やがて君が生まれた。だからキヨウコちゃん。君は何も気にすることはない。おばあちゃんから受け継がれてきた幸せな日々を君も笑顔で送るんだ」

そう言つてミライは笑う。ウルトラマンが何故戦うか。その理由については諸説あるがミライの場合は決まつている。良き人々の送る幸せな日々を、未来を永遠とも思える月日守り続ける為だ。それが彼の戦う理由。

「……うん。私これからも出来るだけ、幸せに生きるよ。ひいおばあちゃんが喜んでく

れるようにならう。

ミライとの話とともに浮かび上がつてくる曾祖母との思い出。節目節目のイベントから何気ない平凡な思い出まで、それらの一つ一つがキヨウコに教えてくれる。曾祖母の選んだ道は、今自分が幸福に生きていることは間違いじやなかつたと。

「その意氣だよキヨウコちゃん」

「あー、あと最後に一つだけ聞かせてもらつてもいいかな?あの時ひいおばあちゃんと一緒に話してたの?」

「それはね?」「ははは、久しぶりだなウルトラマンメビウス!」

声がすると同時にミライはキヨウコの盾になるように素早く動く。攻撃が加えられることはなかつたが依然ミライは警戒の体勢を崩さない。ミライの視線の先に居たのは黒装束の男。一見何の変哲もない平凡な顔立ちだがキヨウコからしても露骨なまでに剣呑な雰囲気を纏つている。

「お前は…レイフ星人スロワ!」

「フン、無駄なまでに記憶力はいいようだな…100年前の恨みを返しに來たぞ」「100年前:あなたはひいおばあちゃんの!?」

「いかにも」

キヨウコの言葉にスロワと呼ばれた男はうなづく。そして答えた。自分こそがかつ

て命の樹の星を襲つた宇宙海賊の最後の生き残りであると。

「目的は…僕への復讐か！」

「あの時貴様とあのガキに負けねば我らがこの宇宙を支配していた物の…！だが文字通りここであつたが100年目だ。あのガキの血脉の前で貴様に引導を渡してくれる！」

「危ないキョウコちゃん！」

「来い！フュージョンライズだ！」

叫びと同時に上空に現れた円盤から赤黒の禍禍しいエネルギーがスロワめがけて大量に放射される。エネルギーを浴びたスロワは目を禍禍しく光らせながら咆哮した。

「があああああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

『フュージョンライズ!!』

そしてその体は有機物と無機物の混ざったかのような状態へと巨大化してゆく。その姿はさしずめ機械で身を鎧つた悪魔。背後に浮かぶのはグロテスクな黒い怪獣と三角形に並んだ丸いレンズが特徴的なロボット。そして黒き破壊の巨人ウルトラマンベリアル。

『クイーンベゼルブ、インペライザー…ウルトラマンベリアル！』

そしてそれ大地に降り立つ。ゴキブリのような人々を不快にさせる黒光りする甲殻と無機質な灰色の装甲、大口径の火砲と陰惨な鋭い爪刃を携えた両腕。そして黄色と赤

がランダムに入り混じった複眼。その悪魔の名は

『ベゼルライザー!!!』

「ベリアル融合獣：試作型のライザーを使つたのか！」

カイジュウを見る未来の顔は戦士の顔になつてゐる。人々の未来を奪う大怪獣に立ち向かう為彼もまたアイテムを取り出した。それは彼がウルトラマンである証の一つ、メビウスブレスだ。

「ミライさん：無事に、無事に帰つて来てね！」

「ああ…メビウース…」

ミライがメビウスブレスを掲げると同時に無限をイメージさせる焰が空中に描かれた。光に包まれた彼の身体は巨大化していく。そして彼もまた悪魔の向かい側に降り立つた。

それは光の巨人。無限に続く光を象徴し、永遠に続く絆の力で人々を守り続ける誇り高き勇者その名は――

「ウルトラマン…メビウス!!!」

黒光りするベゼルライザーの刃とメビウスのメビュームブレードが衝突する。空中で幾度なく切り結ぶ度に火花が散り空に残光が描かれていく。八度目の衝突を得ても両者に致命傷はなし。

「ははは！どうしたメビウス！あの時の威勢は飾りかあ！？」

『くうっ…』

にも拘らず状況はメビウスの劣勢。速度と旋回性について両方でわずかながらベルライナーに上回られていることもあるが、本来なら万をも超える月日戦い続けてきたメビウスの戦闘経験は些細な不利を跳ね返し勝利を収めただろう。彼の劣勢には他の理由がある。

「まだまだ行くぞ…そらあ！」

「「ビギイイイイイイ!!」」

その理由はベゼルライザーの固有能力にある。ベルゼルライザーの背から伸びた黒と灰の突起は瞬く間に成長すると醜悪な怪獣ベゼルブに育ちメビウスに突撃していく。口から吐く光球で、身体の各所にねじ込むようにして備え付けられた火器で、鋭い爪で攻撃していく。これこそが純粹戦闘力では他に劣るベゼルライザーの固有能力。下僕となる怪獣ベゼルブの精製能力である。

そもそもベゼルライザーの基となつたクイーンベゼルブとインペライザーはこうし

た量産と縁のある怪獣である。クイーンベゼルブは下位種であるベゼルブを生み出し操る能力を持ち、インペライザーもまたかつてメビウスと戦ったエンペラ星人との決戦に先駆け量産され13体が地球上に現れ、物量でメビウスを苦しめた。そんな2体の数を増やしやすいという怪獣の性質はベゼルライザーに濃厚に受け継がれている。

空中を怪獣たちとウルトラマンが乱舞する。如何なる戦闘機も追いつけない機動力で行われる死の舞踏は傍目から見れば美しくすら見える。だが実際に行われているのは巨体同士の死闘。そしてその影響は流れ弾や意図的な街への攻撃といった形で人々に現れるのだ。

無論メビウスも負けてはいない。ディフェンスサークルで街を狙つて放たれた光線を受け流し、返す刀で強烈な回し蹴りを放ち不用意に接近した一体の首をへし折る。そして攻撃を放ち離脱していくこうとする2体に向けて腕を十字に組み合わせる。

『メビュームシート!』

メビウスの放つ必殺光線は2体纏めてベゼルブを薙ぎ払い爆散させる。そのまま光線はベゼルライザーへと延びていくが——新たに生成した一体を盾に防がれた。

『な、仲間を盾に!?』

「ふん。こんな雑兵共など幾らでもくれてやる。まあ便利なのは否定しないがなあ」

そういうや否やベゼルライザーは腕の砲口をメビウスへと向ける。巨大な砲口はそ

のまま分解され中から大小合計十三の砲口が出現。一斉にエネルギー弾を放ちメビウスを狙う。

『つ?! シェアツ!』

膨大なエネルギー弾に追われるメビウスは重力による自由落下をも利用してエネルギー弾を躲し続ける。ある時は舞い落ちる木の葉のように回転しまたある時は空力を利用して紙一重でエネルギー弾をすり抜け、どうしても当たる光弾はブレードで切り払う。だが急激な回避運動によりどうしても高度は下がる。すでに彼の滞空するのは街の直上数十メートル。頃合いだとベゼルライザーはほくそ笑んだ。

「今だけは感謝するぞウルトラマンメビウス。貴様らウルトラマンの善人ぶつた精神性に！ぬううん！」

猛る叫びと共にベゼルライザーはさらに2体のベゼルブを射出。合計で9，10体目となるベゼルブはどうも様子がおかしい。これまでにない速度でメビウスに迫りながらもその身をぐくぐくと空中で振るわせまた腹部を始めとする体の各所が危険な熱を帯びて発光している。その悍ましい有様を見てメビウスの脳裏にひらめくものがあつた。

『この怪獣は…まさか!』

メビウスがベゼルライザーの狙いに気づいたのは一重に彼自身もメビュームダイナ

マイトという自爆技を使う事が理由だ。そう、ベゼルライザーの狙いはベゼルブによる自爆特攻。

「ギヤギヤギヤギヤギヤギヤギヤツツ!!!」

悍ましい叫び声を上げ発光するベゼルブが次々とメビウスのバリアに衝突していく。1体2体と轟音と共にベゼルブが次々バリアに当たりその身に抱えた莫大なエネルギーを開放し爆散していく。そして6体目の特攻でメビウスは膝をついた。それと同時にカラータイマーが赤く染まり、ピンチを知らせる音が鳴り響く。

「ふははははは！無様だなウルトラマンメビウス！まさかここまで簡単に引っかかるとは思わなかつたぞ！」

『ぐつ……あ……』

膝をつくメビウスに対し碌な損傷のないベゼルライザーは意気揚々と仁王立ちで街に降り立つ。赤と黄色の複眼はメビウスや弱者への侮蔑に満ち溢れていた。

「しかし本当に不思議だ。貴様らウルトラマンは何故其処までしてとるに足らない人間を守る？それが不可解でならんよ。見ろ」

ベゼルライザーは戦闘の被害から逃れようと必死に走る人々を指さす。そして鼻でその必死さをあざ笑つた。我々に比べ何と惰弱な事か。

「ハツ、奴らは貴様のように俺に抗する力も意思もない。ただレミングスのように逃げ

纏うだけだ。そんな下等な存在を守つていて楽しいのか？自分の心に正直になれよメビウス。その強大な力を自分の為に使つて見ろ』

ベゼルライザーとなり一層強くなつたスロワにはよくわかる。力とはすなわちこの宇宙の真理。強大な力を持つ者こそが全てを手にする権利を持つ。故に彼はメビウスに疑問を呈する。貴様はそれでいいのかと。

『……』

高慢極まりないベゼルライザーの演説を聞いたメビウスは無言。だが顔を彼方へと向けた。戦場から避難しつつも自分を応援し続けるキョウコの姿を。そして再び立ち上がる。不屈の闘志を象徴するかのような勇ましいファイティングポーズをとつて。不死鳥の如く。

『お前は知らないんだなスロワ。人々の送る平穏な人生の素晴らしさを』

かつて宇宙警備隊のルーキー時代に地球に訪れたメビウスもまたその素晴らしさを知らなかつた。しかし地球での戦いの日々の中、彼もまた多くの事を地球の人々から学んでいき、その幸せを守り続けたいと願つた。その思いは万の月日がたつても、この宇宙の地球に来た後も強く胸に燃え続けている。

だからウルトラマンメビウスは戦う。命ある限り。絆の焰が燃え続ける限り。

『その掛けがえのない日々を守る為に僕は戦うんだ：ファイトの意味は欲望じゃない

!』

「頑張つて―――――!! ウルトラマンメビウス―――――!!」

キヨウコの声が聞こえた。かつて彼が救つた少女の苦難の果てに掴んだ幸せな日々。その先に生まれた少女が。

『シェアツ!!』

雄たけびと共にメビウスの姿が焰と共に変わりゆく。焰の如き鮮やかな赤と黄金で刻まれたファイヤーシンボルは彼がGUY'Sの一員として仲間と共に戦い続けた証。不死鳥の勇者たるメビウスの最強の姿。ウルトラマンメビウスバーニングブレイブだ。

「そうか…ならばここで死ねえ！」

ベゼルライザーは一斉にベゼルブを解き放つ。合計8体のベゼルブは複雑な軌道をとり街ごとメビウスを碎こうと一斉に襲い掛かる。

『ハアツ!!』

対するメビウスは不死鳥を象った焰を纏い飛翔。狂ったような声を上げて突撃していくベゼルブに正面から突撃し――容易く粉碎した。

『何ッ!? チイツ』

超高速の体当たり。それだけでインペライザー由来の装甲で頑丈なはずのベゼルブが粉々に碎けていく。追随する為飛翔するベゼルライザーもその速さを追いかれない。

再び放った火砲からのエネルギー弾に對してメビウスは躲すどころか逆落としにして回転しながら流星のように突つ込む。それはウルトラマンメビウスの奥義の一つバーニングメビウスピニンキック！

『でやああああああああああああああああ!!!』

「がっぐおおおおおお!!!おのれ：おのれえ！」

とつさに盾にした左手の火砲毎甲殻装甲が碎かれ、ベゼルライザーは海まで吹き飛ばされていく。水切り石のように海面をバウンドしていくベゼルライザーは10回ほどバウンドしたあたりでようやく体制を立て直し空中に浮遊する。対するは一瞬で残りのベゼルブを全滅させたメビウス。その雄姿にベゼルライザーも覺悟を決めて右腕の刃を掲げる。

「いいだろう…ならば小細工は無用。決着をつけよう」

一度灰と黒が入り混じり肥大化した右腕の刃はメキメキとすさまじい音を立てて圧縮されていく。それは紛れもなくベゼルライザーの一刃に賭ける心意気を示している。メビウスもまた右腕から焰を纏うメビュームブレードを出力する。残りのエネルギーのほとんどを注ぎ込んだ焰の剣は、その姿をブレさせることはない。彼もまたこの戦いを終わらせるため迷いはないのだ。

2者は静かに対峙し———そしてまるで引力に惹かれるかのように自然に動いた。

そして交差する。

背中合わせのように残身を決める2者。一泊の間をおいてずるりとベゼルライザーの姿がズれていく。 ∞ の字に切り裂かれた悪魔の甲殻と装甲が剥がれ落ちていき、その体を崩壊させていった。

「なるほどこれが…ウルトラマン、か」

そしてベゼルライザーは粉々に吹き飛び爆散する。爆発の後残るメビウスは彼方へと飛び去っていく。彼の飛び去つていく下、街の人々はメビウスを讃え歓声を上げていた。

自分たちの日常を守ってくれた最高のヒーローに。

時がしばしたつて空に星が瞬く夜。戦いを終えたミライとキヨウコはキヨウコの家までたどり着いた。そしてミライは先程中断されたキヨウコの質問に口を開く。「トワが最後に僕に言つたのは：僕を想つてくれる言葉だつたんだ」

「ミライさんを？」

「うん」

何処か堪えるようにミライは答える。

『私は幸せだった。だからあなたの日々も、未来も幸福でありますように』って。僕の幸せを願ってくれた。だから僕は戦い続けるよ。君たち地球の人々と、僕の日々が幸福であり続けるように』

そう言ってミライは手を京子に差し出した。握手を求めるように。

「うん。私もひいおばあちゃんと同じように祈り続けるよ。私たちのウルトラマンの為に」

そう言ってキヨウコはミライの手を握り返す。キヨウコの手のひらに太陽のような温かさが広がった。